

肉体の悪魔

DIABOLO IN CORPO

マルコ・ベロッキオ監督 マルーシカ・デートメルス主演

脚本■マルコ・ベロッキオ/エンリコ・バランドリ 協力■エンニオ・デ・コンチーニ 撮影■ジュゼッペ・ランチ

美術■アントニア・クリサンティ 衣裳■リーナ・ネリ・タヴィアーニ 音楽■カルロ・クリヴェッリ 編集■ミル

コッカロネ 製作■レオ・ベスカローロ 出演■フェデリコ・ピッツァリス/アニー・タラウレンツィ/リッカルド・

デトッレブルーナ/アルベルト・ティスタージオ/1986年 イタリア・フランス合作/カラー ビスタサイズ/1時間55分 配給・株

式会社 ラネセンソ/L.P.Film Srl/ISTITUTO LUCE/ITALNOLEGGIO CINEMATOGRAFICO FILM SEXTILE

——まだ盲目の僕の官能を、突き刺した女。



■解説

世界は「肉体の悪魔」に三たび揺り動かされた。まず第一次世界大戦時を背景に「出征中の夫に背信する妻と学生の情熱的な情事」を輝やかしくも刺激的に著した小説がその始まりだった。しかもこの著者レイモン・ラディゲが18歳であったことがより衝撃度を増し、テーマの衝撃性と共にフランスから世界的規模へとセンセーションの渦を巻き起こした。1923年の事である。二度目の激動は原作の映画化によるものであった。奇しくも、原作の登場が第一次大戦の数年後ならば映画化は第二次大戦終了の翌年(1946年)という類似社会状況の下であり、ここでもまたモラルの崩壊を危ぶむ人々の糾弾を呼ぶが、各国で上映禁止や場面の大幅な削除にあいながらも大成功を収めている。この映画で「少年の激しい初恋の苦痛と困惑」を見事に演じたジェラルド・フィリップが大なる注目を浴びて、今や、戦後フランス映画史上、最もスクランダラスな作品として神話化されてきた。監督はオータン・ララ。そして三たびこのスクランダラ性に火をつけたのが現代イタリア映画界きっての逸材マルコ・ベロッキオ監督である。

M.ベロッキオの名は「ラスト・タンゴ・イン・パリ」他のベルナルド・ベルトルッチとよく並び称されるが、日本では「ポケットの中の握り拳」と「凱旋行進」が自主映と映画祭でわずかに紹介されただけであり、今度の「肉体の悪魔」が本格的な日本初登場となる。「抑制対自由」「権威対反抗」「伝統対無秩序」が拮抗し、熱情という破壊力に支えられる人間の愛と希望を描き続けてきたM.ベロッキオが、前作を凌ぐ官能のリアリティに挑み「正常性とは何か?」を問いかけたこの作品もまた物情騒然たるものとなった。「より人間らしい情に満ちたヒューマンイズムと、規則に断固として従おうとする態度との間の選択」という原作の精神とテーマを忠実に尊重しながら、M.ベロッキオは設定を今日のイタリアに置き換えた。例えば、時代の背景を「大戦下から'68年以後のポスト・テロリズムの世相下」に移し、夫(兵士)は「捕えられたテロリストであり、女の許婚者」に替わる。そして主役が「悪魔性を帯びた女、殺された警察幹部(ブルジョア的・体制側の)娘」へと原型は変容するが、その分今日性が強調され創造の域を広げている。「経験は乏しいが、人の感情や人生について知ろうとする新しい価値の探究者」が主人公であり、凡庸と敵対する狂気と性本能の入り混じった二人の若者の独善的な愛の相克が、神話化された前作より、もっと大胆で、イデオロギー的にはもっと挑発的となって40年ぶりに甦ってきた。ここでは官能性を型にはまったモラルの破壊的な活動としてドラマチックな隠喩に使われている。

主演は日本にはJ.L.ゴダールの「カルメン」という名の女(1983)で衝撃的にデビューしたマルーシカ・デートメルスが熱演。転向したテロリストを見捨て、愛のベクトルの方向のままに行為する(それはしばしば周囲からは狂気とみなされ、かつて彼女は恋愛関係になる少年の父親から精神治療も受けていた)、当世風のモラルを、その肢体によって極めて象徴的に演じている。現代の「肉体の悪魔」は何よりも愛(心)と官能(身体)の結合が個人の最良のモラルを成し、またそれが一般化することが最上のモラルであることをデートメルスはその肢体で映像的に訴える。ベロッキオはデートメルスという希有な表現者を得て、この作品の完成度をより高めることに成功している。



DIABOLO IN CORPO

肉体の悪魔

マルコ・ベロッキオ監督 マルーシカ・デートメルス主演

脚本■マルコ・ベロッキオ/エンリコ・パランドリ 撮影■ジュゼッペ・ランチ

1986年イタリア・フランス合作/カラー/ビスタサイズ/177分/配給/協賛/株式会社 シネセゾン



■ストーリー

ローマの高校。中庭に面したアンドレアが学ぶ教室では家族の「狂気」に関するパスコリの詩について授業が行われていた。すると突然、若い女の叫び声が聞こえ、クラス中が窓際集まる。むかしの屋根の上では下着姿の黒人女が飛びおりてやると嚇していた。騒ぎで目を覚ましたジュリアはふらふらとバルコニーに出てきた。彼女は黒人女と瞳を交わし無言の哀しみを伝えあう。その情景を目にしたアンドレアはジュリアを忘れられなくなってしまった。翌日アパートから出かけていくジュリアを追ってアンドレアは教室を脱け出す。テロリストに殺された父の墓碑に花を供えたジュリアが次に訪れたのは、テロリスト事件の犯人たちが審判を受けている法廷だった。ジュリアが意味あけな合図を送った男はプルチーニ。彼は長く投獄されることを避けて過去の活動を一切捨て仲間メンバーについての情報をもたらしたのだ。しかも彼はジュリアの婚約者でもあった。櫛の中に入れていたテロリストグループが騒然としている最中に一組の男女が抱き合い始める。ジュリアは二人に興奮し、そばにいた見も知らぬアンドレアにしがみついた。次第に熱狂していく彼女をアンドレアは法廷から連れ出ししてしまうのだ。唐突な行動を起こすジュリアの不思議な魅力にひかれてアンドレアはアパートを訪ねる。そこにはプルチーニの母親が息子の出所を控えて未来の嫁ジュリアを監視していたのだ。慌ててアンドレアを部屋に隠したジュリアは鍵をかけて出かけてしまう。彼女が戻った時待ちくたびれたアンドレアは激しく抱きあう。アンドレアの父親は精神科医だった。そしてジュリアは彼の患者なのだ。周囲の注目を聞けばそれだけに却って燃え上がる情熱と欲望。ヒステリックなまでの笑い声を上げアンドレアの気を引こうとするジュリアとは対照的に、彼はいつもどこかに冷静さを保ち続けていた。やがて二人の関係はプルチーニの母親の知るところとなり驚いた夫人はアンドレアの父親に通告をする。咎められ逆上したアンドレアは家を飛び出しジュリアの許へ行くのだが、混乱した精神状態のジュリアの方はナイトクラブで酔って気が狂ったように踊り果てるのだ。やがてプルチーニの釈放の日がやってくる。「普通」の生活に戻れたことを祝う人々の群れからジュリアは姿を消す……。



前売券絶賛発売中!

一般券 1,200円 / 学生券 1,100円
(当日一般 1,500円 / 学生 1,300円のところ)

11月14日(土)より11月27日(金)まで上映

上映時間	11:00	1:05	3:10	5:15	7:20
------	-------	------	------	------	------

東口 伊勢丹新館隣

テアトル新宿 (352) 1846